

## 保健体育教員養成課程における専門実技授業における 受講生の学びの焦点についての調査: 大学1年生を対象として

### A Survey of Students' Attitudes toward Sports Classes in the Health and Physical Education Teacher Training Program: A Course Aimed at Learning Teaching Methods for First-Year College Students

木野村 嘉則・小島 正憲  
KINOMURA Yoshinori・KOJIMA Masanori  
愛知東邦大学人間健康学部

#### 要 旨

大学1年生は高等学校までの体育と指導者養成課程の体育実技の間で、できるようになるから教えることができるへと目標の変化に接するタイミングとなる。大学の体育授業にて授業の目的や到達目標を示して、教えることに関連した目標に沿った授業を展開したとしても、受講生の意識が指導者の養成に向けた授業となることを理解していなければ、教えることに関連した学びとまらない可能性がある。そこで、本研究の目的は、大学1年生における体育教員養成課程の体育授業に際した学びの意識に関する調査を目的とした。1年次開講の教職課程の学生が履修する専門実技の授業を対象として、毎回の授業、およびすべての授業全体を通じて学んだことについて自由記述方式にて調査を行った。その結果、大学1年生においても授業の運営方法によって学びの意識をできるようになるだけでなく、指導に向け教えることに関連付けたものにできることが可能となった。

#### はじめに

教員養成課程では、実践的指導力を身につけさせることが課題として挙げられている(文部科学省, 2015)。実践的指導力について、坂本(2018)は「まず第一に、「実践的指導力」は教員養成段階において身に付ける基礎的な資質能力であり、それは従来より大切にされてきた強化や教職に関する専門知識等の理論の学習である。その点で「不易」といってよい資質能力である。第二に「実践的指導力」は学校現場における学びである、今次の学習指導要領改訂の流れを含むものである」と「実践的指導力」の内容をまとめている。

教員の仕事は多岐にわたるものである<sup>1</sup>が、差し当たって体育の実技や指導法に関する授業を通じた目標としては、学校現場にて授業での教科指導の職務の実践になるだろう。教員養成課程のカリキュラムでは、主に体育に係わる専門的事項を学ぶ科目として、「体育実技」、「『体育原理, 体育心理学, 体育経営管理学, 体育社会学, 体育史』・運動学(運動方法学を含む。)」と「生理学(運動生理学を含む。)」が挙げられるが、このうち「体育実技」以外は講義の科目となる。このため、「体育実技」の授業は教科内容の素材となる運動文化を実技により学ぶ唯一の機会となって

いる。

多くの大学の教員養成課程では、体育実技に関する授業では複数のスポーツ種目に関連する科目が開講され、教科教育に関する種目群の科目が6単位程度の単位数にて開設されている（長見真ほか，2010）。また、体育実技の科目については初年次から順次配当されることが多い。そして、体育実技の授業の後で、あるいは同時並行しながら教科教育（指導法）に関する科目を実施することが多い。こうした授業を経て最終的に体育授業を実施できるよう学習を展開し、その後、教育実習などの現場実習を経て、体育授業の教科指導に係る実践力を養成することになる。なお、以降、「体育実技」の授業についていわゆる一般教養科目としての体育実技と体育授業における実践力養成のための体育実技を分けるため、後者を専門実技の用語にて扱うこととする。

教科指導に関係する科目の中では模擬授業を活用することが多いようである。模擬授業の実践による実践的指導力の養成に関係づけた研究が多数報告されている。模擬授業の実践は教師としての教授技術や授業分析を通じた気づきの獲得を可能とする（岸本，1995；日野，2003；長谷川ほか，2003；深見，2004）。さらに、模擬授業や模擬授業に関連した映像などを通じて省察を深めることで実践的指導力の養成が達成されている（徳永，2009；木原ほか，2007；木原ほか，2008；藤田と細越，2009；藤田と池田，2010；藤田ほか，2011；村井ほか，2009；田井ほか，2018）。また、授業時間外の時間に省察を深める課題に取り組むことで実践的指導力の養成が達成されている（藤田，2013）。このように、実際に授業を行ったり、授業を振り返ったりすることで、よい体育授業の基礎的条件（高橋，2000）である「授業の勢い」や「授業の肯定的雰囲気」についての認識を高めることができる（日野，2003）ことから、模擬授業の実践は教員養成課程の学生が教育実習や、卒業後に初年次から教科指導の職務を滞りなく行うことに貢献している。

こうした模擬授業を通じた教科指導に関する試みでは、体育の授業づくりやその教授スキル、省察に関する学びを深めるという成果があることが分かる。しかしながら、多岐にわたる運動領域にかかわる教科内容への習熟との両立が困難という課題を有している（渡辺，2022）。そこで、専門実技の授業では教科内容の習熟に関する役割を担うこととなる。

専門実技の授業に関するこうした観点からの研究では、たとえば、（塩野，2008）は体育授業を扱う教員養成において、「（筆者注：運動は）できれば教えられる」と想定してはならないと指摘し、生徒が「できるようになる」ことに目を向けるように大学の教員養成カリキュラムを構築すべきであると述べている。この際、専門実技の授業では運動技能の学習とその自らの学習の精微な分析を取り扱い、上級生となってから、他者が運動技能の学習を行う過程を分析する能力の養成を専門実技とは別の機会にて実施するよう提案している。

白石（2018）も運動ができる者と運動を指導できる者とが同じではないことを指摘し、小学校から高等学校まで行われる体育実技や、大学の教養課程にて行われる体育実技では「できない」運動が「できる」ようになり、その種目を楽しめるようになることが学習目標となるが、指導者養成のための専門授業では、これだけでは不十分であると述べている。自身の専門実技の授業事例を紹介しながら、「できる」ことに加えて「できる」ために必要な運動技術や学習（指導）の方法を理解し、運動の「結果の違いを生み出す経過の違い」を見抜く運動観察能力が重要となることを説明している。

いずれの研究でも、専門実技の授業では運動技術の習得に加えて、指導に関係した知識や観察能力を身に付けることの重要性が指摘されている。こうした指導に関係する学習を進めるには、学生が運動技能の向上だけではなく、指

導力向上の基礎を高めようとする狙いを理解することが必要となる。先述した通り、通常、教科の指導に関する授業に先立って、専門実技の授業にて複数のスポーツや運動に関して学ぶこととなる。

しかしながら、学生からすると体育実技の授業では、高等学校までの被教育者としての体験しかない。そのため、教育者としての視点を持ちながら技能向上に取り組む（すなわち、運動技能を高めようと練習に集中しながらも、自己および他者の運動技術の習得課程の運動観察にも注力する）といった、学習対象の拡張や変化への対応が課題となるのではないだろうか。先の専門実技の授業に関係する2人の指摘のように、専門実技の授業の担当者は運動技能の習得や向上のみを追求するわけではないことに留意して、教科の指導に関する授業への架け橋となるように工夫をすることとなる。しかし、専門実技の授業に関する報告では、学生が適切に学習対象に対する焦点を当てることができているかの確認は、授業者による授業の内容報告が主となっており行われていないようである。

そこで、本研究では、指導法の習得に焦点を当てた専門実技授業において、受講生の学習対象に関する意識について調査し、その学習対象として運動技術の習得だけでなく、指導法に関連した事項にも焦点を当てているかを確認する。

## 方法

### 1 調査対象クラスと対象者

愛知東邦大学の専門スポーツ実習の授業の中で1年生を対象とした授業には、「専門スポーツ実習（器械運動）」と「専門スポーツ実習（陸上競技）」がある。双方の授業のシラバスにて学習者への目標の中に、実技の技能向上だけでなく、指導法の学修が設定されていることを確認して、調査対象クラスとした。

器械運動の受講生は1クラス38名、陸上競技の受講生は2クラスで合計56名であった。この中から、37名教職課程登録者を調査対象者とした。

なお、器械運動の授業は新型コロナウイルス感染症対策として、本来の開講期である前期には対面授業を開講できなかった。そのため、後期に集中授業として7回の授業にて実施した。陸上競技の授業は後期に対面授業にて15回の授業にて実施した。

それぞれの授業の目的と概要は以下である：

「本授業では、中・高等学校の学習指導要領に例示されている器械運動の技能について取り上げ、それらの技を習得することや正しく指導できるようになることを目的とする。内容はマット運動、跳び箱運動、鉄棒運動、平均台運動で構成し、教員採用実技テストを中心とした授業展開をする。また、器械運動は危険を伴い、恐怖心を抱きやすい種目であるため、初心者から安心して技に取り組めるよう、技の構造をよく理解させ、その上で段階的な練習をすることで、各技の特性に応じた運動技術と適切な練習方法を理解させる。（専門スポーツ実習（器械運動）」

「本授業では陸上競技の各種目について段階的な指導方法を学ぶ。その際には、各種目についての基本的な原理を理解したうえで実際に実技を行うとともにレポートにて振り返りを行う。そうすることによって、各練習方法についての注意点や各種目の特性を理解する。（専門スポーツ実習（陸上競技）」

いずれの授業においても、実技を行い技能に取り組むとともに、段階的な練習や指導法を取り扱う授業となっている。

授業の到達目標については、器械運動の授業では、「各技における専門的な知識をもとに、課題技を習得（実践的

能力)している。」ことと、「課題技の本質(巧みな運動動作に共通する動きの特徴)を理解し、説明できる。」の2つが設定されていた。陸上競技の授業では「陸上競技の基礎的な指導法を記述できるようになる」ことと、「ポイントを押さえた見本を示すことができるようになる」こと、「他人の運動を観察し、指導上の具体的なポイントを見抜くことができるようになる」の3つが設定されていた。このように、運動技能に関しては、器械運動の授業では技を実施できる技能、陸上競技の授業では種目の見本を示すことができる技能が求められた。指導法に関連しては、器械運動の授業では技の構造を捉えることが求められる一方で、陸上競技の授業では種目の指導法の記述と、指導に際した他者の観察が求められた。

評価に際しては、器械運動の授業では実技テスト(90%)と自身の取り組みの評価シート(10%)、陸上競技の授業では自身や他者の技能の習得の様子および種目の指導法をまとめたレポートにて実施されていた。

## 2 調査方法

毎回の授業終了後に、「あなたが今日の授業にて学んだと思ったことを教えて(詳しく説明して)ください。」という設問に自由記述方式にて回答させた。また、すべての授業が終了した後に、「後期の授業全体を通じて主に勉強になった(学んだ)と思ったことは何でしょうか?」という設問にも回答させた。この際にはGoogleフォームにて調査を行った。この際には、調査への協力の有無によって対象者に不利益が生じることがないことを書類にて説明し、任意参加の同意を書面にて得た。特に成績調査や指導に不利益が生じないよう、すべての授業が終了し、成績評価が終了してから調査の回答を確認することを伝えた。

得られた回答について、内容に応じて以下のように分類を行った。

1. 自身の技能向上に向けた学びについて
2. 自身の身体の状態への気づき
3. 教え合いの重要性への気づき
4. 的確なアドバイスや指導の重要性
5. 種目の運動特性と指導上のポイントへの気づき
6. 体育教師になるために重要と思ったこと
7. 運営や安全上の留意点
8. 教える側の目線に立つことの重要性
9. 授業内容や受講方法についての記述

それぞれの項目に分類された主な内容については結果の章にて詳述するが、1つ目と2つ目に関する記述は、主に自身の技能向上に焦点を当てた記述として扱い、3つ目から8つ目に関する記述を、主に指導に関連した記述として分類した。9個目の授業内容や受講方法についての記述は、主に初回授業にて行った授業のガイダンスにて、それぞれの授業を受講するに際しての留意点に関連した記述であったため、いずれにも関連しない記述とした。

また、単に授業にて行った技や練習方法の名前を順に記述していた回答があった。この場合には、質問の意図が適

切に伝わっていなかったとみなして、有効回答から除外した。

各授業回および全授業終了後の回答について、自分の上達に関するものと、指導に関連するものの件数を集計した。

### 3 統計処理

授業全体を通じた学びの意識の焦点について、器械運動の授業と陸上競技の授業を比較するために $\chi$ 二乗検定を用いた。統計的有意水準を5%未満として検定を行った。

## 結果

### 1 各分類項目における主な回答について

毎回の調査にて収集された回答は、前述したように12の項目に分類した。それぞれの項目について説明し、いくつかの回答について紹介する。この際には、収集された回答について変更を加えず、回答されたままの文言を記載し、そのままでは文意が取れないと想定される場合だけ、筆者による注を加えている。

#### 1. 自身の技能向上に向けた学びについて

自身が技能向上に向けた体の動かし方についての記述を分類した。たとえば、以下のような回答を自身の技能向上に向けた学びとして挙げられている。

「倒立した時に自分では真っ直ぐだと思っけていても真っ直ぐではないと分かったのもう少し真っ直ぐなるように意識したら綺麗な倒立できるとおもいました。」

「倒立の際の、腰を乗せるという感覚をちょっとわかったような気がする。」

「今まで野球やバスケといった競技を10数年やってきたので、いざ砲丸投げをやるとなると、無意識に上から投げる動作が出てしまっていた。野球など、投げるのが主になる競技をやっていたので、砲丸投げもある程度できるのではないかという考えは甘すぎたと痛感した。」

「倒立の際、おじけづいたりして倒れないよりも向こうに倒すことを意識して回転すること。前転の前に1度、姿勢を維持しなくてはならないため脚を閉じ、力を入れ、姿勢制御をしなくてはならない。(倒立前転の授業での記述: 筆者注)」

「短距離走の練習でツーステップやワンステップ(のドリル: 筆者注)があったが体を後ろに反らすのではなく、少し前傾姿勢(ボクシングの構え)を取ったらスムーズに前に進むようになった。」

「ハードルを跳ぶ際に後ろ足を上斜めでスライドする意識をしたら、ハードルに足がかからないことが分かりました。」

「今回の授業では、(筆者注: 背面跳びを)跳んだ際に横に寝るように跳ぶことを意識した。まだ、腰が曲がって寝るように飛ぶことができていなかった。」

#### 2. 自身の身体の状態への気づき

ここでは、実技を実施した時に気づいた自身の体や心の特徴についての記述を分類した。前の項目と異なり、必ず

しも技能向上に向けた気づきではないが、実技を行った時の自分自身の体や心の状況を報告している。たとえば以下のような回答があった。

「本番になると動きの流れを忘れてしまう。自分は緊張に弱いと改めて感じる。」

「体操の技を久々にやってみて今できる技と今できない技があることがわかりました。」

「最初は恐怖心に勝てず、グズグズしていましたが、今ではもっと綺麗な形で出来るようになりたい！とまで思えるようになりました。」

「マット運動をやる上で体が柔らかい方が有利だが僕はかたいのでかたいなりに工夫しないと行けないと感じた」

### 3. 教え合いの重要性への気づき

ここでは授業中に教え合ったり、学生同士で関わることに関する回答が報告された。たとえば以下のようなものがあった。

「みんなで教え合いながら上手くなっていくのを高める大切さを学んだ。」

「仲間とアドバイスし合うとより完成度が高くなることも学びました。」

「友達と見合って、できていないことを、修正し合うことの大切さ、細かく伝え合うことの重要性を学びました。」

### 4. 的確なアドバイスや指導の重要性

アドバイスや指導に際した声のかけ方に関する記述について分類した。たとえば以下のような回答があった。

「人や生徒に教える際には自分だけがわかる教え方ではなく、誰もがわかりやすいと感じ自分の教え方を噛み砕いて教えることで理解してもらいながら楽しく体を動かして生徒が学んでいけるようにすることが大切だと言うことを学びました。」

「教える立場になり、大きくわかりやすく丁寧な言葉使いを使うことも必要だと学びました。」

### 5. 種目の運動特性と指導上のポイントへの気づき

器械運動や陸上競技に関する運動の特性や、そこから考えられる指導上のポイントについて記述された回答をここに分類した。たとえば以下のような回答があった。

「側転をするときは横からやるのではなく倒立のようにまっすぐ体を動かすことを知りました」

「マット運動は技の技術はもちろん全体の流れも必要となってくるということもわかった。」

「走る時足を後ろに思いっきり蹴りながら走ると思っていたのですが、足は真っ直ぐ上げて後ろに残さないようにして走ることを知りました。走り始めた時は前傾姿勢で少しずつ体を真っ直ぐにすることも知りました。」

「バトンパスは次走者の走り出すタイミングも大事であるということが分かった。走り出すタイミングが早いと受け渡しの距離が遠くなりバトンを渡すのが難しかった。」

「砲丸を遠くに飛ばすコツは、砲丸を投げるのではなく砲丸を押し出すことを学んだ。また、砲丸を押し出す距離を出来るだけ長くすることも学んだ。」

#### 6. 体育教師になるために重要と思ったこと

特に教員や先生になるためのものとして焦点を当てている記述についてここに分類した。たとえば以下のような記述があった。

「先生になった時のための指導法」

「教員免許を取るために必要な器械運動の競技の技や指導方法」

「陸上競技の授業を受ける中で教員になるに当たって教員に必要なスキルや学生への対応を学べたのでとても重要な事だと思いました」

#### 7. 運営や安全上の留意点

スポーツ実施時や、教員としての安全管理に関する記述をここに分類した。たとえば以下のような回答があった。

「砲丸投げを行う際に安全に配慮し人との距離感や投げる方向などを意識して行うことが重要だということ。」

「陸上競技をやってきて隠れたさまざまな危険があるということがわかりました。授業をする立場になった時に安全に楽しめるような授業を考えなければいけないと思いました。」

#### 8. 教える側の目線に立つことの重要性

技能向上だけではなく、指導に際した知識を学んでいくにあたって、指導者の目線に立って受講することが重要となることを、双方の授業にて説明していた。そのため、教える側の目線に立って受講することに関する記述をここに分類した。たとえば以下のような記述があった。

「どの種目においても自分が出来るようになるだけでなく、人に教えるという部分を身につけることが必要だということ。」

「小学校や中学校の体育とは違い、教わるのではなく、教える立場で話をきかないといけないこと、ただやるだけでなく、それぞれのポイントを掴みながらやらなくてはいけないことを学びました。」

「自分が指導する側としての意識を持って実技の授業を受けることが必要ということを学びました。」

#### 9. 授業内容や受講方法についての記述

ここでは、器械運動でも陸上競技でも、特に初回授業にて受講に当たっての注意事項を説明していた。そのため、授業内容や受講方法についての記述を学んだとした記述をここに分類した。たとえば以下のような記述があった。

「専門スポーツ実習について」

「授業の進め方」

「この授業の受け方」

## 2 それぞれの授業における回答の集計

表1に器械運動、表2に陸上競技の授業における各回および全授業終了後に学生の学びに関する意識の焦点の結果を報告している。それぞれの回答件数について、有効回答者数で除した値を示している。器械運動の授業においては、各回の授業では初回授業を除いて自身の上達に関する学びの記述が指導に関連した学びの記述より多いものであった。しかし、授業全体を通じた学びの意識は指導に関連した記述の方が多くなっていた。陸上競技の授業については15回の授業のうち、6回の授業では自身の上達に関する記述件数が指導に関する記述を上回り、9回の授業では指導に関連した記述の方が自身の上達に関する記述より多かった。授業全体を通じた学びの意識は器械運動の授業と同じく、指導に関連した学びの記述の方が多いうものであった。なお、特に双方の初回の授業に際しては、授業の受講方法に関連した記述が多かった。そのため、自身の上達と指導に関連の件数を加算しても有効回答者数に満たないものとなっている。受講方法に関する記述は初回に多く見られたが、その後は少数であったため、表には含まなかった。

表3に全授業終了後の学びの意識の焦点について器械運動と陸上競技の授業の比較を示した。いずれの授業においても、指導に関連した学びについての報告を、自身の技能向上についての報告よりも多くしているが、陸上競技の授業の方が指導に関連した学びへの意識が強いことが示された ( $p=0.0079$ ,  $h=0.8260$ )。

表1 器械運動の授業における各授業回および全授業終了後の学生の学びに関する意識の焦点

| 授業回         | 1   | 2   | 3   | 4   | 5   | 6   | 7   | 授業後 |
|-------------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 自身の上達 (件/人) | 0.3 | 0.9 | 1.0 | 1.0 | 0.9 | 0.9 | 0.8 | 0.6 |
| 指導に関連 (件/人) | 0.4 | 0.7 | 0.6 | 0.8 | 0.3 | 0.7 | 0.7 | 0.8 |
| n           | 27  | 26  | 25  | 19  | 24  | 19  | 16  | 16  |

表2 陸上競技の授業における各授業回および全授業終了後の学生の学びに関する意識の焦点

| 授業回         | 1   | 2   | 3   | 4   | 5   | 6   | 7   | 8   |
|-------------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 自身の上達 (件/人) | 0.0 | 0.5 | 0.9 | 0.5 | 0.6 | 0.8 | 0.5 | 0.7 |
| 指導に関連 (件/人) | 0.6 | 1.3 | 0.6 | 0.6 | 0.8 | 0.6 | 1.0 | 0.5 |
| n           | 29  | 32  | 30  | 26  | 14  | 24  | 25  | 18  |
| 授業回         | 9   | 10  | 11  | 12  | 13  | 14  | 15  | 授業後 |
| 自身の上達 (件/人) | 0.5 | 1.0 | 0.8 | 0.8 | 0.8 | 0.9 | 0.5 | 0.1 |
| 指導に関連 (件/人) | 0.7 | 0.8 | 0.9 | 1.1 | 0.6 | 0.6 | 0.6 | 0.9 |
| n           | 20  | 17  | 23  | 27  | 25  | 25  | 24  | 28  |

表3 全授業を通じた学びの意識の比較

|      | 自身の上達       | 指導に関連        |
|------|-------------|--------------|
| 器械運動 | 9<br>(0.40) | 13<br>(0.60) |
| 陸上競技 | 2<br>(0.08) | 24<br>(0.92) |

$p=0.0079$ ,  $h=0.8260$

## 考察

### 1 受講生の学びの焦点について

本研究では、小学校から高等学校まで行われる体育実技や、大学の教養課程にて行われる体育実技では「できない」運動が「できる」ようになり、その種目を楽しめるようになることが学習目標となるが、専門実技の授業ではそれだけでは不十分である（白石, 2018）ことに注目し、大学1年生の専門実技授業にて、指導や教える側の目線に立った学習への意識を受講生が持って受講できているかを調査することが目的であった。

そのために、1年次配当の専門実技授業にて、各授業の後に学生による学びの内容を報告させた。学びの焦点については、主に自身の運動技能向上に関係する学びと、指導に関連した学びについての回答が多かった。自由記述の形式で回答を求めたため、1人の学生が1回の授業にて複数の記述を行っていることもあるが、器械運動の授業では2回目以降の授業では8割以上の学生が自身の到達に関連した学びを得ていると報告した。一方で指導に関連した学びについての報告は3割程度から8割程度であった。陸上競技の授業では運動技能向上関連した学びの報告は5割程度となっていることもあった。一方、関連した学びは6割程度から多くのが複数個以上の報告をした回もあることが示された。

しかしながら、授業全体を通じた学びの意識に関する報告では、いずれの授業においても自身の到達に関連した報告よりも指導に関連した報告の方が多かった。このことは、大学1年生が専門実技の授業にて自身の技能向上だけではなく、指導に関連した学びを得ようとしており、運動技能の習熟にそれぞれの授業回にて取り組みながらも、全体としては指導に役立てようとする意識があったことを示唆している。

こうした結果となった理由について説明することは難しいが、双方の授業において初回授業で授業の目的や狙い、到達目標についてガイダンスを実施することに時間を割いているという特徴が関係した可能性がある。そのため、特に初回授業では器械運動の授業でも陸上競技の授業でも自身の技能向上に関連した学びを報告する受講生が少なく、指導に関連した学びを報告した。たとえば、学生からの初回授業からの学びについての報告では「今までは生徒の目線だけでよかったけれど、これからは先生になるという自覚がある（器械運動）」や「この授業は今まで学校で行ってきた体育の授業と違い、自分の運動能力を向上させる目的ではなく、指導法を学ぶ授業だということを学んだ。（陸上競技）」といったものがあつた。初回授業でのこうした授業の性格の違いの説明によって、受講生の学びの焦点を指導に関係する学びに当てさせることができる程度可能となることが示唆された。

このような学びの意識が指導に関連した学びに向いていることと、学習行動自体の在り方の実態についての関連は本研究では捕捉することはできていない。たとえば、陸上競技の授業では運動技能の習熟に取り組みながら、指導に関連した学びをレポートにて行っている。こうした取り組みが学習をどのように充実させているかについて、小嶋ほか（2022）の方法を用い学習事例を蓄積することで、専門実技における学修成果の充実に向けた実践研究の蓄積が可能となろう。授業においてねらいとして掲げた学修目標への到達度について受講生の学修成果を報告することを試みた研究がほとんどない（渡辺, 2022）ため、こうした事例の蓄積が専門実技の授業研究の充実に重要となる。

### 2 それぞれの授業の特徴について

専門スポーツ実習の器械運動と陸上競技はいずれも1年次開講の授業である。通常、器械運動の授業は前期、陸上

競技の授業は後期開講の授業であるが、調査を行った年は新型コロナウイルス感染症対策の関係で、いずれの授業も後期に開講された（器械運動の授業は集中講義として7回の授業にて実施された）。

それぞれの授業では技や各種目の技能向上を目指した実技の授業が行われた。この際には器械運動の授業ではマット運動、跳び箱運動、鉄棒運動、平均台運動それぞれの指定された技の習得が目指され、陸上競技の授業では砲丸投げ、短距離走、リレー、ハードル走、走高跳についてポイントを押さえた見本ができるようにという技能習得の目標が示されていた。

器械運動の授業では技の習得を通じて、各課題技の構造のポイントを理解し、段階的な練習を実技形式の授業を通じて体験することで指導法を経験し、理解することができるように授業が実施されていた。陸上競技の授業ではそれぞれの種目の段階的な練習を実施し、それぞれの練習方法についてレポートにまとめることで指導法を理解するように実施されていた。

評価に際しては、器械運動の授業では実技テストによって技能レベルの確認によって主に評価が行われ、陸上競技の授業ではレポートにて指導法の理解度を基にした評価が主に行われていた。

こうした授業の焦点の違いによって、器械運動の授業と比べて陸上競技の授業の方が、指導に関連した学びに受講生が焦点を当てやすくなる一方で、器械運動の授業の方が、技の習得に際した技能向上に焦点を当てやすくなった可能性がある。このことは、授業全体を通じた学びの意識についての比較（表3）に現れ、陸上競技の授業の方が指導に関連した学びにより焦点を当てている。しかしながら、一方で、授業全体を通じた学びとして技能向上に関連した学びについての報告が陸上競技の授業ではごく少数（1人あたり0.1件）となっている。

器械運動と陸上競技の授業の実施方法の比較から、学習目標の設定や評価方法の設定によって、受講生の学びの意識の焦点をコントロールできる可能性が示された。ただし、どの程度の技能習得や指導法の学習を行うことが妥当であるのかについては検討することができなかった。また、指導に関連した運動観察能力の養成についても検討できなかった。そのため、専門実技の授業として、求められる運動技能や運動観察能力も含めた指導に関する技能の水準の検討は今後の課題となった。

## おわりに

専門実技の授業は体育教員養成に際して、唯一の実技を通じて学習材を体験して学ぶことのできる授業となっている。専門実技の授業では多岐にわたる運動領域にかかわる教科内容への習熟を担うべきである（渡辺, 2022）ため、指導法の学習に目を向ける一方で、技能の向上にも目を向ける必要がある。また、今後はそうした指導に向けた工夫を凝らした専門実技の授業の学修成果についても体育授業の実践的指導力の育成という観点から検討する必要がある。本研究では、大学1年生においても、指導を意識した学びが専門実技の授業にてある程度可能であることが示され、また、授業の実施方法によって、指導力の育成や技能向上といった学習目標への焦点を制御できる可能性が示された。

実践的指導力の育成を念頭において、専門実技の授業に関する実践事例を蓄積するとともに、教職課程におけるカリキュラム全体との関連を意識したそれぞれの科目のあり方について、さらに検討を重ねる必要がある。

## 注

- 1 この点について岩田（2008）は「実は日本の初等・中等教育の教師たちにとってteach（教えること・授業）はその職能のうちのごく一部でしかない。日本の教師たちは各教科の知識や技能を授けteacherである以上に、児童生徒の生活や進路に関する相談に乗るcounselorであり、その家庭生活に問題を抱える場合に解決を担うsocial workerであり、『校務分掌』という名のもとに割り振られた学校の管理運営的な仕事を担うadministratorであり、部活動の各異教科外活動を指導するinstructorであり、さらには学校の属する地域の活性化に寄与するcoordinatorであり、時には児童生徒の素行の取り締まりや校区の秩序維持を担うguardianあるいはpolicemanとしての役割も負う。」と述べている。また、日本の教師の専門性について「日本の教師の『専門性』を捉える際には、西欧の『専門職』（profession）とは異なり、職能の分化が不十分で、なおかつその『専門性』の一部に『人間性』としかいいようのない諸要素を含むという性質があることに留意する必要がある。」としている。

## 引用・参考文献

- 藤田育郎（2013）よい体育授業に対する認識の育成を目指した模擬授業の成果：授業映像視聴による省察の変容。信州大学教育学部研究論集（6）：143-52.
- 藤田育郎，池田延行（2010）体育科模擬授業の効果的な実施方法に関する検討。国士舘大学体育研究所報 29：95-99.
- 藤田育郎，細越淳二（2009）体育科模擬授業における学習成果の検討。国士舘大学体育研究所報 27：79-86.
- 藤田育郎，岡出美則，長谷川悦示，三木ひろみ（2011）教員養成課程の体育科模擬授業における教師役経験の意義についての検討—授業の『省察』に着目して—。体育科教育学研究 27（1）：19-30.
- 深見英一郎（2004）天理大学における教師教育プログラムの検討—体育の模擬授業実践及び授業観察の分析を通して—。天理大学学报 209：23-34.
- 長谷川悦示，岡出美則，高橋健夫（2003）筑波大学における体育教師教育カリキュラム及び指導法の検討：『体育授業理論・実習 I・II・III』の授業展開。筑波大学体育科学系紀要 26：69-85.
- 日野克博（2003）体育教師教育カリキュラムの検討：愛媛大学での模擬授業の実践を例にして。4：49-57.
- 岩田康之（2008）教育改革の動向と教師の「専門性」に関する諸問題。久富義之編著『教師の専門性とアイデンティティ』勁草書房。p43.
- 木原成一郎，日野克博，米村耕平，徳永隆治，松田恵示，岩田昌太郎（2008）教員養成段階で行う体育の模擬授業の効果に関する事例研究：テスト映像を視聴した学生が気づいた体育授業の要素。広島大学大学院教育学研究科紀要。第一部，学習開発関連領域（57）：69-76.
- 木原成一郎，村井潤，坂田行平，松田泰定（2007）教員養成段階の体育科目における模擬授業の意義に関する事例研究。広島大学大学院教育学研究科紀要 第一部 学習開発関連領域 56：85-91.
- 岸本肇（1995）マイクロティーチングによる体育授業の体験学習の効果に関する研究。神戸大学発達科学部研究紀要 2（2）：195-202.
- 小嶋季輝，上赤祐司，小山雄，木野村嘉則（2022）中学校3年体育授業における多視点型教材『背面跳び』の効果検証。体育学研究 67：213-33.
- 文部科学省（2015）これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について。中央教育審議会（答申）.
- 村井潤，松田泰定，木原成一郎（2009）模擬授業を複数回実施することの効果に関する事例的研究—ソフトバレーボールを教材として。学校教育実践学研究 15：39-48.
- 長見真，阿部悟，小浜明（2010）日本における保健体育科教員養成カリキュラムに関する実態調査。仙台大学紀要 42（1）：13-30.
- 坂本建一郎（2018）『実践的指導力』概念をめぐる—考察：中教審答申での位置づけを中心に。多摩美術大学 教職研究（創刊）：55-60.

- 塩野克己（2008）教師養成における実技のあり方を問い直す．伝承 8：1-8．
- 白石豊（2018）体育・スポーツ指導者養成課程における専門体育実技のあり方を問う．朝日大学保健医療学部健康スポーツ科学科紀要 1：3-15．
- 高橋健夫（2000）子どもが評価する体育授業過程の特徴—授業過程の学習行動及び指導行動と子どもによる授業評価との関係を中心にして．体育学研究 45（1）：146-162．
- 田井健太郎，河合史菜，元嶋菜美香，久保田もか，高橋浩二，宮良俊行（2018）教員養成課程における模擬授業の省察に関する研究．長崎国際大学論叢 18：31-46．
- 徳永隆治（2009）模擬授業による体育授業づくりの意識形成に関する事例的研究．安田女子大学紀要 37：197-207．
- 渡辺輝也（2022）体育授業の実践的指導力の育成に向けた専門実技のあり方に関する研究動向の批判的検討．スポーツ教育学研究 42（1）：15-33．